

特別寄稿

シェリー誕生二百周年に想う

工藤直太郎

(一)

本年5月、ニューヨーク市民図書館会議室で開催されたシェリー生誕二百年記念会は、一詩人にたいする追想会としては、時局に照応した最も意義深い会合であった。研究発表を行った人々は、地元のアメリカ人は圧倒的に多かったが、注目すべきは、ベルリンの壁崩壊以来ソ連の鉄鎖から解放された東欧諸国のシェリー研究家が多く参加したことであった。我国からは元福岡大学教授の石川重俊氏が「日本に於けるシェリー研究の到達点」について発表し、京都府立大学教授床尾辰男氏が「エピサイキディオン(MSS)」について発表した。シェリーの中心思想は、自由平等の人権を基礎とする「縛を解かれたプロメシュウス」の詩劇である。私はこのたび石川教授の訳本(岩波版)を改めて読んで、今日ヨーロッパに起っている新情勢の意味を解明し得たのである。

我国にシェリーの名を始めて伝えたのは、明治15年末松謙澄の漢訳「雲雀詩」であった。前句五言後句七言交互の漢詩訳である。末松は青年期に英国ケンブリッジ大に学び、留学中英詩に親んだという。のち政治家となって大臣を歴任した。

明治25年は、シェリー生誕の百周年に当たっていた。しかるに同年の年表を調べてもシェリーの名が発見されない。日本の英文学研究もシェリー時代まで進捗していなかったのだろう。

越えて大正11年は1922年にあたる。この年から百年前の夏にシェリーはイタリアのピサに滞在中、友人のウィリアムズと共にレリチの湾で兩名溺死したのであった。シェリー溺死百周年。この頃は日本に於けるシェリー研究

は開花して、全国の官私大並びに在野の研究家、翻訳者は多彩を極めた。ここに詳しく物語る必要なく、「英語青年」^{※註}は当時の消息をよく伝えている。私はシェリー没後百周年を英国で迎えた。私はおもにエジンバラに住んでいたが、第一次世界大戦終息して日が浅く、戦傷の復員学生が多数大学の構内に見受けられた。血と泥の塹壕戦の苦難を嘗たジークフリート・サスン、ロバート・グレイブス、ロバート・ニコールズ、エドモンド・ブランデン等の戦争詩人らは、祖国の詩壇に返り咲き、旺んに民族自決や自由平等を説き回った時であった。彼等はバイロンやキーツよりもシェリーアンであった。若き日のシェリーは、圧制に悩むアイルランドに潜入して、カトリック解放と自由と独立を宣言して治安当局の追放処分を受けた。しかるにシェリーの没年百周年に、当時のロイド・ジョージ内閣は、アイルランドに自由と独立を与えて共和国を実現した。黄葉下のシェリーも快心の微笑を漏らしたことだろう。そのころアイルランドの詩人イエーツはアイルランド独立について感想を述べていた。

この年英国では年初からシェリーに関する追想や評論を準備していたらしく「ロンドン・マーキュリー」や「クリティシズム」等の文芸雑誌は、シェリー愛好家のアーサー・シモンズ、リッチャード・オルデングトンなどの感想や評論を載せていた。7月8日はシェリーが遭難した命日であった。ロンドン・タイムズはシェリー哀悼の社説を載せ、またその文学附録はシェリー追悼録を特集した。しかし当時私が最も興味をもった記事はバイロン、シェリー、キーツの三角関係であった。ことに三者の晩年イタリアに於ける関連記事

であった。

三人の個性的関係は英国在住の時代すでに明らかであった。シェリーは自由と平等と独立を主張する社会派型。バイロンは漁奇的ロマンスと高踏的優越感を主義とする国際型。これに反してキーツは英語による官応美を主張する国内消費型。ところが英語による審美追求の手順は、同じ英語国民の反感を買ったのだ。女々しき軟弱な耽美的迷夢は英語を毒するものだ。「ブラックウッド」や「コータリー評論」から猛烈な攻撃が起った。微妙な審美追求上の良否は、外国の読者には分からない。国内消費型のキーツの詩は、国内の批評家に依ってホロクソに貶された。キーツの病気は悪化するだけ。バイロンはキーツを殺したのはエジンバラ評論家の蛮行だと言った。かくしてキーツは悪化した病気の療養のためローマに去ったのだが、間もなく同地に病没した。これを聴いたシェリーは痛恨悲嘆のあまり鎮魂歌「アド・ネ・エズ」一篇を草してその冥福を弔った。シェリー水死の前年である。

ところが、貴族の出で、一代の驕児バイロンはその初期の詩「倦怠のとき」が「エディンバラ」評論の悲難を買った時、キーツのように労作「エンディミオン」がエディンバラの文学誌の悪評を受け、社会的地位も金もなきままに無念の涙に暮れるような男ではなかった。直ちに「英国詩人とスコットランド批評家」と言う一文を草して「お前ら平民ども何を言うか。文学にも人間同様に等級があるんだ」と反撃した。だから彼がスペインからギリシアにかけて最初の大陸旅行中執筆した「チャイルド・ハロルド」が帰国後出版され国内から大歓迎を受けて増版を重ねたときの彼の言葉「一朝目覚めて我身天下に有名なるを知る」は正に貴族の声であった。人間の上下を文学と結びつけたところに彼の長所があり短所でもあった。

しかるにシェリーの考えは人間社会は自由

であり平等であって、上下の差別があつてはならないのと言うのである。彼は昔一定の封を受けた大地主の子であった。彼は8、9歳の頃ある朝、買ったばかりの高価な美しい靴をはいて散歩に出掛けた。ところが半分破れかけた泥靴をはいて帰宅した。家人驚いてその理由を訊ねると「途中乞食の児に出遇ったが、その靴のあまりのみすぼらしさを見て、無理に脱がして新らしい靴と交換して来たんだ」と答えたので家人もみな呆れたと言うのが有名な話である。

シェリーは貧乏の理由で相手を軽蔑したためしがない。みな一視同仁の仲間だった。ところがバイロンにとっては貧乏は罪悪と思っていた。「エキザミナー」と云う左翼の雑誌をやっていたリー・ハントと仲が良かったのは貧乏を意に介せず社会を渡り歩いていたことであつた。ロンドンのしがない馬車屋の子ゆえ大地主の子シェリーなどと会うのは嫌だと逃げていたキーツを説き伏せて、茅屋の自分の家で会させたのはハントであつた。カーライル夫婦がロンドンのチェルシーに新居を営んだとき、近所にハント一家が住んでいた。貧乏人の子沢山。顔もろくに洗わない様な子供たちが、破れた着物を着て遊んでいるのを見た子宝に恵まれないカーライル夫婦はハントの子供たちに時々お菓子や履き物などを与えていた。ところがハントの細君もお引きずりで、家事に頓着しなかったと云う。

バイロンはハントの雑誌編集の才能を称して、シェリー水死の年、英国からイタリアに呼んだ。シェリーは久しぶりでハントと異国で会って涙を浮べて喜んだ。バイロンがハントを呼び寄せた理由は「リベラル」と言う雑誌を発行する目的であつた。ところがハントは相変らず貧乏世帯。それがバイロンの気に入らない。結局両者喧嘩となり別れて仕舞つた。

(二)

シェリーの晩年は益々民族の自由、独立に傾斜して行った。1820年頃、イタリア南部のラテン種族は他国の支配を脱しようとして騒擾を起したことがあった。シェリーがこの時書いた詩は「ナポリ市民へのうた」「自由へのうた」であった。長い間トルコの支配を受けて苦勞したヨーロッパ文明の淵源ギリシアからイタリアに亡命してきた政客と親しくなったシェリーは彼に英語を教え、自らはギリシアの日常用語を教わった。そしてギリシアの独立を話し合ったと言う。バイロンがシェリー没後1年半経って、ギリシア独立の義勇軍に参加して、ギリシアのミソロンギに上陸したが不幸にもマラリア熱に罹って同地に病没したのは、1824年4月19日であった。

祖国の政治家でも、庶民の自由を圧迫する保守的人物はシェリーの憎悪的であった。ことにナポレオン戦争後、英国の利益を代表しメッテルニヒのウーン会議に出席したカッスルレー外相を蛇蝎の如く嫌った。

ナポレオンはオータールーの戦で敗退を喫し、捕えられて聖ヘレナ島に流罪。その後、英国に丁年^{※注2}以上の男子に選挙権を与えて議會を改革すべしと言う声が全国に起った。1819年8月15日マンチェスターの市民は、リー・ハントの大演説を聴くべく同市聖ピータールー広場に集まった。市側は不穩の形勢を察知して機動隊を動員して警戒にあたらしめた。ハントのアジ演説を聴いた群衆は興奮して官庁に投石し始めた。大騒擾の危険を感じた市当局は輕騎隊を召集して鎮圧したが馬蹄に蹂躪されて多くの死者を出し、時の内相カッスルレーの暴挙と非難の声が起った。ハントは捕えられて投獄二年の刑に処せられた。これをローマで聞いたシェリーはハントに書を送り、カッスルレー弾劾の詩とともに大いにハントを激励した。当時オータールー戦闘の記憶はまだ新しかったので世にこれをピータールーの反乱と呼んだ。ハントはまたシェリーと同じく、人間には上下の差別あるべから

ずと、主宰した雑誌「エキザミナー」に、時の摂政皇太子を「芳紀50の美男子も肥りすぎ」と漫画的に弥次ったために不敬罪に問われて貧乏なハントは500ポンドの罰金刑に処せられて参ったことがあった。

シェリーがもし第二次大戦後の世界に生きていたとしたらどんなことをしたであろうか。大国ソ連に隷属していた70年代のチェコやハンガリーの反乱をどう見たであろうか。スターリンの戦車に虐殺された少数民族の苦難に無念の涙を流したろう。ベルリンの壁が崩壊して第二次大戦以前は独立国であったバルチック三国は再び独立を宣言した。すると国際平和賞を貰ったゴルバチョフは本性を現してリトアニア人民を銃殺した。このときシェリーは、銃殺すべきは長い間少数民族を奴隷にしていた大国の独裁者と主張したであろう。彼は自ら「プロメシュウス」のデモゴゴンの役割を演じて人間の自由を奪うすべての圧政者をこの地上から放逐したであろう。

(三)

1922年シェリー水死百周年の際はたまたま英国に在り、ロンドンやエジンバラで記念講演会や幻灯会に出席して、今でもその印象を忘れない。そのほかに当時の新聞雑誌を読んで面白いと思ったことは、シェリー、キーツ、バイロン三者の女性観であった。筆者の名は忘れたが、大体の論旨は今でも覚えている。

先ず、9歳にして一女性に恋して悩んだと言うバイロン36年の生涯は、旅の歴史でもあったが、女性遍歴の歴史でもあった。年頃になって遠縁のアン・イサベラ・ミルバンクと恋愛したが、バイロンの一本調子の性格に不安を感じて結婚を拒絶した。だがバイロンの情熱に動かされてついに承諾して夫婦生活を営んだが、案の定一年も続かずオーガスタ・アダー女を設けたまま別れて仕舞った。その時のバイロンの冷淡な態度に社会の非難が集って彼は大陸に雲かくれせざるを得なかった。

何よりも彼が前妻ミルバンクの失望を買った点は、当時の貴族階級に見る未開人的優越感と女性を男性の嗜好品と見たことであった。バイロンの魅力に引かれた女性はいろいろあったろう。或は彼のロマンチックな悲哀感にほだされたり、或は彼の人生の風波を物ともせぬ驕慢さに引かれたり理由はさまざまであった。

無政府主義者で哲学者兼小説家ウィリアム・ゴドウィンの活躍はこの当時であった。彼の前妻はクレアモントと言って未亡人。この人は一人の息子と娘を連れてゴドウィンと再婚した。娘の名をジェーン・クレアモントと言った。娘の母クレアモントは再婚後まもなく亡くなった。そこでゴドウィンは当時女権論者として有名なメリー・オールストンクラフトを後妻に貰った。彼女も、フランス革命中バリに滞在してアメリカの士官イムレーとの間に生れたハニーと言う女の子の連れ子を伴ってゴドウィン家に納まった。ゴドウィンとの間に一女を設けたが、出産間もなく産褥熱で亡くなった。この女兒をメリー・ゴドウィンと言った。これがシェリーの後妻である。

さてミルバンクと別れたバイロンはしばしばゴドウィン家に入出してクレアモントの連れ子を誘惑して、結婚しなかったが同棲して1816年の冬はイタリアのベニスですごした。しかしこの場合は、一朝にして有名にした、「チャイルド・ハロルド」を読んだり、その悠揚迫らざる貴族の風格を見て、淋しい境涯にあったジェーン自身がバイロンを誘惑したと言う説が多い。いずれにしてもバイロンにとっては、自分に尽してくれる女性は有難い。まもなく二人の間に女の子が産れた。クララ・アレグラと名付けて洗礼式を行った。式の記帳に子供の父親バイロン卿とはっきりと加筆された。しかしバイロン卿ならずとも寄りかかってくる女があれば、その重さを感じるのは男ごころ。バイロンはジェーンとの同棲は退屈になった。バイロンは赤ん坊の養育をシ

ェリー夫妻に任せ放し。酒と女を求めてベニスやピサで荒れた生活を送ると、生活に困ったジェーンはフロレンスに出掛けて家政婦となる。まもなくアレグラはローマの修道院に預けられて扶養されるが、両親も面会に行かず、シェリー夫婦が心配して会いに行くだけだった。

バイロンの女関係の最後の仕上げは、イタリア人ギチオリ伯爵夫人との同棲生活であった。シェリーがピサ滞在中、バイロンを訪ねてこの夫人に会ったことがあった。そしてこの伯爵夫人について、こんな風書いている。「ラ・ギチオリは大層綺麗で、涙もろく、罪のないしとやかなイタリア人で、バイロンのために前途ある身を犠牲にしたが、私の友人とこの婦人とまた人間性を知るところが、多少でもあれば、今後この女が自らの向う見ずを悔む折りが度々あろう」

バイロンは夫人と同棲する以前に、夫人を説いて前夫と別れさせたのだと言う。ただ漸く手にした幸福が三年しかつづかなかつたのは残念であった。

(四)

とかく酒は美味く、女は面白しと言うのは洋の東西を問わず、どこでも通ずる言葉だが、バイロンはこれによってインスピレーションを与えられ、スタミナを燃やし、詩を作り、劇を書き、ついに女気のないギリシャ独立の義勇軍に投じ、敵前上陸の途上急死した。

シェリーは盃を手にすることが少なかったが女には不自由しなかった。しかし現実にあった女はいずれも満足出来るものではなかった。スピノザは人間は神の破片であると言ったが、シェリーの女はみな真如の破片であった。前妻のハリェット、後妻のメリーも涙多き真如の破片。ただ理想の片鱗を呈示したにすぎなかった。だから彼は真如の影を求めて他の女を追うた。それは人妻でも未亡人でも構わなかった。

フランス革命のさ中に生れたシェリーは14歳。イートン高校に入学した。家庭では比較的自由に育ったシェリーにとっては、その煩瑣な校則は堪え難く思った。時代おくれの規則は廃止すべしと主張した。これに対して学校はシェリーに退学を命じた。家庭に帰って家庭教師について勉強していたが、年17歳、オクスフォード大学に入学すると、学内の空気は古色蒼然、中世紀修道院と異ならなかった。その沈滞、入学して化学や植物学に興味をもち「無神論の必要」と題して論文を書いた。これが大学当局者の目に入ってシェリーを退学処分にした。父親大いに怒って学費を停止し、シェリーの帰宅と家人のシェリーに会うことを禁じた。シェリーはロンドンに移り浪々の身となった。シェリーに同情してともに退学した同級生ホッグは郷里の北英グラム市に帰った。

シェリーの妹二人は、ともにロンドンの女学校で勉強していたが、兄の困惑に同情して、自らの学費を節約して毎週生活費を仕送りした。その仲介の労に当たったのは、同級生ハリエット・ウェストブルックと言うロンドンの宿屋の娘。美人でてきぱきした娘だったと言う。毎週シェリーにあって、革命や自由平等を聴いてそれに共鳴したに相違ない。ところがこの娘が無神論者と交際していると評判になり学校で迫害された。それがハリエットの父親の耳に入って帰宅を禁ぜられた。当時は無神論者は社会の治安と秩序に反するならず者、無神論を広言すれば投獄された時代だった。シェリーは毎週生活費を差入れするハリエットの困惑を聴いてすっかり同情して、持ち前の向見ず。しかし考えてみれば英国の法律では、結婚の適齢には達していないのだ。ただスコットランドでは可能ときいて、直ちにエジンバラに急行。エジンバラで曲りなりにも結婚は成立したが、旅費が無くなった。国境を越えると、ホッグの家のあるグラム市。訪ねて見るとホッグは仕事もなく遊んでいた。

シェリーは一時新妻のハリエットをホッグの家に預けて、金策のためロンドンに大急ぎ。またハリエットを受取りにグラム市に行くとホッグはハリエットに横惚して、本当はおれがお前と結婚したかったんだと言寄って大いに困ったとシェリーに告白したので、シェリーも一時交遊を中止することになってホッグと別れた。この男、シェリーの無神論に共鳴しただけあって、世間一般の常識もなかったようである。ところがホッグはのち法律家として渡世し、ひろく国外を旅行して、晩年シェリーの伝記などを書いた。その中にシェリーはあらゆる点で天才肌の男だったが、ただ詩だけは下手だったと書いて読者の失笑を買って却って売れたと言う。

しかしシェリーは女権論者メリー・オールストンクラフトと虚無主義者ゴドウィンの中に産れたメリー・ゴドウィンに夢中になってハリエットを棄てて国外に駆け落したため二児を残して自殺した。社会の非難がシェリーに集った。あれほど夢中になったメリーも一緒になってみれば不満足だった。彼はメリーを産み落して間もなく死んだ女性解放の旗手メリー・オールストンクラフトのまぼろしに恋をしていたのである。彼が他人の女に理想の女性のまぼろしをみて恋した場合を拾ってみると、エリザベス・ヒッチナー先生、マリア・ギスボーン夫人、ウィリアムズ夫人、最後に罪なくして修道院に幽閉されたと思ひこんだイタリアの美女エミリア・ピアニに対して超靈魂の永遠の女性だと言って「エピサイキデオン」なる長詩を捧げて、女房は嫉妬のあまりヒステリーを起した。ジョージ・サン普森がその英文学史の中に現実的でやさしいアン・フリッカーがコールリッジの如き夢想家と結婚した不幸に同情しているが、この点シェリーはもっと夢想家だったようだ。

最後にキーツ。彼は耽美主義の芸術至上派。英語の美意識についてその極限まで追求して名工の如く珠玉の詩を創作した。外国人には

結局極限の審美はわからない。その意味で彼は内需派であったが、国民もあれほど若い身空であれだけの語学力をよく発揮したものと驚いた。しかし不思議なことには、人間については、全く現実派。女性については、シェリーの如く理想像を求めなかった。実際の女だから、欠点も不備もあったろうが、彼はハニー・ブラウンと言う一人の女を恋していた。死ぬまでひとすじに恋したが、ハニーはそれに報いなかった。あわれ片恋に終わったまま、遠くローマの病院で死んだ。彼にとっては、現実的な世話女房でさえあればよかったが、女の方はキーツの完全芸術主義を自分に適用されるのを惧れて彼の求婚に応じなかつ

たのかも知れない。

バイロンはその^{びん}術気と稚気と俗気を持って大陸に活躍して、ゲーテをしてセイクスピア以来の天才だと言わしめ、ヨーロッパの人気者になった。しかし英国に於ける彼の評価は、依然低調である。

以上はシェリー没後百周年当時の僕の見聞であるが、その百周年は英国で、二百年祭は日本で迎えたことは、無能の身ながら、自分も馬齢百年に迫らんとして感慨に堪えない。

下半身野辺送りしてその上は

平成四年八月十三日

東京・無量庵にて。

工藤直太郎先生は九十九歳。先生は早稲田大学卒業後、新井^{ひら}奥遠の謙和舎に在舎。奥遠の感化を受ける。その間、六合雑誌を編集。1922年からエディンバラ大学、ケンブリヂ大学で8年にわたり学究生活。帰国して早稲田大学教授となる。武蔵野女子大学講師をもって勇退。先生は日本で始めてシェリーの書簡集の研究を公刊された(1955)。小平のお住居を無量庵と称し自適しておられる。〔石川重俊 記〕

編集部註

注1) 1922年の雑誌「英語青年」(Vol.46,47)は、この年をシェリーの年として、毎号のようにシェリーの訳詩、研究を掲載している。特に福原麟太郎のシェリー研究が目をはく、文教大学図書館には、「英語青年」は創刊号から所蔵。

注2) 丁年以上。(壮丁。兵役にあたる壮年の男子。丁年。兵役にあたる3年。即ち成年以上)。

文教大学図書館ではシェリー・コレクションというごく薄手のパンフレットをニュースとして発刊して来ていて、研究者はもとよりシェリーに関心を寄せる学生にも一般の人にも広くこのコレクションを利用して頂くようにとの配慮である。シェリー研究の一里塚にと願って来た。

この四月にシェリー・コレクションに関する委員会を学内に発足させ、図書館と密に連絡をとりながら、当文庫のいっそうの

充実を計ることになった。この委員会の仕事は大きく二つある。ひとつはシェリー・コレクション発行に際して学内外の研究者への原稿依頼、編集である。もうひとつはシェリーに関する研究図書を選本・蒐集である。これを機会にシェリー研究に関するニュースの蒐集にも努めて行きたいと思っている。

委員：本田和也(委員長)・石原武・川上蓉子・長谷川美樹(事務局)
今後ともよろしくお願いいたします。

